

避難所に生まれている絆

避難所では放射能の见えない恐怖におびえながら多くの人々が暮らしている。

家族を亡くされた方、いまだに行方が判らない肉親を探している人、家を流された人、放射性物質から遠ざかるために避難してきた人など、その事情は様々だ。また、家を失ったり勤告を受けて避難してきた先生と子どもと一緒に居住しており、お年寄りも含め、あらゆる年齢層の人々が地域ごとにグループになり、一大ファミリーを形成している。

ここでは不安の中にも一人ひとりがお互いを思いやる気遣いが息づいており、最近になって、ようやく届くようになった援助物資に感謝しつつ限られた物資を分け合う姿がある。さらに、この生活を献身的に支えている多数のボランティアの人たちがいる。

コミュニティの崩壊とか他人への無関心ということが現代社会に底流する問題として論議されている今、災害と人災によって、かりそめにはあったとしても人々の繋がりが生まれていることは、一見、皮肉な状況にも思われるが、決してそうではなく、これは私たちの社会が、いまだ協同的な歓びやそれを求める精神を失ってはいないことを示しているものと信じたい。

防空壕と避難所

頭上には爆撃機が飛んでいた。海からは艦砲射撃の恐怖があった。

65年前、太平洋戦争当時、私は5歳だった。爆弾と砲弾から逃れるために、私の一家は近隣の家族とともに、近くの丘に掘られた防空壕に避難した。

防空壕の中では、数家族の寄り合いによる拡張されたファミリーができ、寝食を共にした。それぞれの家のおじいちゃん、おばあちゃんも一緒になり、みんなのおじいちゃん、おばあちゃんだった。食糧のきわめて乏しい時代だったが、防空壕の中では、それぞれの家から持ち寄ったおやつが子どもたちに与えられた。これは当時としては格別のことであり、育ち盛りの私たちにとっては、何ものにもまさる喜びだったことを鮮明に覚えている。また、そこでは何人かの異年齢小集団ができ、昼も夜もない窮屈な防空壕内でも、子どもにとってはそれなりにワクワクする楽しい時間を過ごすことができた。

そのような私の体験を避難所の子どもたちに押し付け、だからガマンしなさいなどと言おうとしているのでは毛頭ない。

現在、相馬市には800人を超える大所帯の避難所もある。そこでの子どもたちの姿を見